Joseph Andrews と諷刺の問題

三　谷　法　雄

〔1〕

『ジョウゼフ・アンドルーズ』はそのタイトル・ページに示されているようにフィールディングが愛好するセルバンテスの影響のもとに描いた善良で到るところに笑いをまきちらす副牧師アダムズの性格だけでも不朽の作品となるだろうし、又このアダムズを中心とするいろいろの人物及び彼らをめぐる事件の面白さがこの小説の特徴として挙げられている。しかし『ジョウゼフ・アンドルーズ』を論じる場合には、フィールディングがこの小説を書き始める重要な契機となつたリチャードソンの『パミラ』の出版のことを考えなくてはならない。それまで劇やエッセイの作者としてその才能をふるつていたフィールディングは、劇作における政治諷刺によつて自ら招いた１７３７年の演劇取締法の通過によりその筆を折る。それがわずか数年の後になつて小説という新しい分野にふみ出すことになつたのは全く偶然のように思われる。最初の小説『ジョウゼフ・アンドルーズ』がリチャードソンの小説に反撥を感じて生れたという運命はフィールディングの小説の性格を示すものであり、又彼に最後まで、リチャードソンとライバルのような形をとつて対称的な小説の出版をさせることになる（註１）。フィールディングの小説執筆の態度は『序文』における「すべてが自然（Nature）の書から写されており、一人物、一動作でも作者自身の観察と経験に基いていないものはない」という言葉に示されている通り、人間乃至は人生を偏らない位置から眺めて人間の性格・行動を写実に生き生きと描こうとしている。そこで人生における歪みは容赦なく暴露されて作者の批判をうけることになる。リチャードソンもこの批判の目を免れなかつた。

フイールデイングは現実の欠陥をその局外に立つて冷静に批判しようとし、その批判は多く諷刺という形をとつている。

この諷刺が最も痛烈になつたのは『ジョナサン・ワイルド』で、時の宰相ウオールポウルへの諷刺と皮肉に終始している。『ジョウゼフ・アンドルーズ』は一般に認められている通り『パミラ』のパロデイをもつて書きはじめられており、リチヤードソンはこの小説に重要な役割を果すとともにフイールデイングの小説の発展の上にも重大な位置を占めることになるが、ここでは諷刺という見方からその第一作『ジョウゼフ・アンドルーズ』を眺めて、フイールデイングの小説における諷刺の問題を明らかにする手がかりとしたい。

〔2〕

１７４０年に『パラミ』が出版されると非常な評判となり広く愛読された。ところがそこに述べられている御都合主義の処世道徳に飽きたらなかつたフイールデイングは翌年Conny Keyber という偽名で*An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews*（註２）という書物を出しリチヤードソンを揶揄した。フイールデイングはPamela を Shamelaと置きかえ、Mr.B を Boobyと引伸しており、シヤミラは男心を知りつくしたしたたか者で金持の馬鹿息子がまんまとその策略にひつかかるという趣向にしている。操正しい娘が幸福な結末をうるという小説『パミラ』が裏返しにされ、その中の人物や事件が巧みに反対の見方から解釈され一々パロデイされており、『パミラ』の痛烈な諷刺作品となつている。フイールデイングはこの『シヤミラ』で『パミラ』に対する憤慨の気持を一応直接的な形で生のままに発散させたと考えられる。次いで１７４２年に出版された『ジョウゼフ・アンドールズ』でも再び『パミラ』が取上げられて諷刺の対象となつている。

更に注意すべきことは『パミラ』が出版された当座フイールデイングはその作者を誤つてコリー・シバーと考えていたということである(註３)。

『パミラ』はとく名で出たし、著者のリチヤードソンはその頃単なる印刷業者であり文学者として無名であつたから、フイールデイングはそれを自分の宿敵であつたシバーに帰してしまつた。しかしまもなくしてその著者がシバーでないことを知り、リチヤードソンへの諷刺が更新されて『ジヨウゼフ・アンドルーズ』にあらわれることになる。この小説では『シヤミラ』にみられたような性急で粗野な態度から離れ、もつと広い視野に立つて『パミラ』をとりあげている。

〔3〕

先ずシバーへの諷刺について見よう。『ジヨウゼフ・アンドルーズ』の第一巻第一章でフイールデイングは「最近出版された愛すべき男女のみごとな模範を描く二つの本」として『パミラ』とシバーの自伝*An Apology for the Life of Colley Cibber, Comedian* に言及している。フイールデイングは劇作家時代からシバーと交渉をもち、初めはフイールデイングの処女作を劇場の支配人であつたシバーがとりあげてくれたりして恩義を感じていたが、彼の愚鈍さ、横暴さを知るに及んで自分の劇の中で盛んに揶揄嘲弄していた。このようないきさつがあつたところへシバーの自叙伝が1740年4月に出版され、そこにフイールデイングを攻撃する文章がみられたので彼は早速『チヤンピオン』紙上でやりかえしている（註4）。同年11月に『パミラ』が出るとフイールデイングは前に指摘したようにそれもシバーによるものと誤つて、その反撃として出した『シヤミラ』の筆名をConny Keyberとし直接シバーをあてこすつている。しかし『パミラ』の真の作者を知るに及んでフイールデイングの攻撃の対象はシバーからリチヤードソンに移つている。そこで、『ジヨウゼフ・アンドルーズ』では『シバー自伝』を『パミラ』と並べて槍玉にあげ、

「前者は、自分が教会や国家の最高の地位に昇進するのを免れたとほのめかす

ことによつて、世俗的権勢の軽蔑すべきことを、何と巧みに我々に教えていることか！　優越者には絶対に服従すべきことを、いかに熱心に説いていることか！さらに、恥を恐れるというような窮屈でみじめな感情を持たないように、何と申し分なく戒しめていることか！　名声というあの幻影が空虚でくだらないものであることを、いかに明瞭に暴露していることか！」（i．1）

という皮肉たつぷりな書き振りで俗物シバーをあげつらい、又同章で男性の貞潔ということにふれ、かの「偉大な弁解者」もその模範をたれなかつたというが、これ以後シバーはあまり注目されず彼に対する諷刺は比較的少ない。

単純なアダムズについて「コリー・シバー氏と同様で、悪意とかねたみという感情が人間に存在することを知らない」（i．3）とし、「偉大な弁解者は少し観察の目を働かせたら、そういう感情が人間の心に現実に存在するということぐらい納得がいつた筈である」（*ibid.*）とシバーのセンスのなさを皮肉つている。彼の伝記が文法を無視した不正確な英語で書かれていることへの諷刺から「偉大なシバーは数と性を混乱させ、あらゆる文法の規則を意のままに踏みにじり、英語を撹乱するといえども汝が人間の分別心をゆがめるには及ばず」（i．7）といい、又桂冠詩人となつたがその書く詩は平凡なものであつたことにあてつけて「数多の小鳥の歌い手共は……当代の桂冠詩人よりも何倍か美しい頌歌をくり返した」（i．12）と書いている。それから言及は一時途だえ、第三巻に入つてからミューズの女神に呼びかける言葉の中でシバーの作品にふれて「コリー・シバーの作品のある頁に、少しの文学の香味も加えず彼の意向にさえ反して、彼に強いて英語を書かしめたる汝よ」（iii．6）というあてこすりや、「最近の弁解者の言葉を用いれば、あらゆる伝記作者の模範……」（iii．12）というシバーの自伝の中の言葉をとりあげての揶揄がみられる。

『ジョウゼフ・アンドルーズ』の中のシバーへの諷刺はこの程度であり、最

初は気負つた態度でシバー攻撃に立向つたのであつたが、『チャンピオン』紙上での嘲弄と『シャミラ』での挑戦に憤慨の気持は一応昇華され、それに『パミラ』の作者についての思いちがいにも気付いたことからシバー諷刺の意欲を失つてしまつたと思われる。攻撃の意欲を失つたところにはすぐれた諷刺は生れず、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の第一巻第一章で『パミラ』と並べて取りあげてみたもののそれにつづくものがなく、時折言及して揶揄する程度にとどまつてしまつた。それはこの小説執筆当時のフィールディングの攻撃の対象がすでにシバーから完全にリチャードソンに移つていることを示しており、『パミラ』への諷刺にとつてかわられてしまつたからである。

〔4〕

『ジョウセフ・アンドルーズ』でその主人公ジョウゼフはパミラの弟であり、彼女が玉の輿にのつた B氏の伯父トマス・ブービー卿のもとに奉公していることになつている。ジョウゼフは姉と同様に操正しく、パミラがその若主人から誘惑をうけたと同じくトマス・ブービーの死後その未亡人から誘惑されるが、姉の模範にならつてその誘惑をしりぞけるといつた構想で物語が始まり、この部分は明らかに『パミラ』のパロデイである。このパロデイはジョウゼフがどうしてもなびかないことに憤慨したブービー夫人が彼を解雇するところで一まづ途切れる。フィールディングは自分の描く人物に興味が移つてパロデイのことを忘れてしまい、アダムズを中心としたこの小説独自の世界を展開する。そして最後の巻に及んで最初のパロデイの部分と辻つまを合せるように、今ではもう結婚したパミラとその夫ブービーを登場させ『パミラ』への諷刺を再びとりあげるというのが一般の説明である(註5)。 しかしこの様に考えるとこの小説は『パミラ』のパロデイから偶然に生れた作品になつてしまい、フィールディングの「この種の書きものがこれまで我国語において試みられたことを作者は知らない」(Preface) といつて自らの企ての新しさを自負する

気持と矛盾することになる。そこでJames Sutherland が言うように（註６）、フイールデイングはこの小説を書いている間常にリチヤードソンのことを意識していたと考えられる。

リチヤードソンの作品のパロデイをしたことは、パミラをジヨウゼフにかえたと同じにB氏をブービー夫人にかえて小説『パミラ』の構想を興味ぶかく裏返しにしていることで明らかである。この場合フイールデイングは『シヤミラ』を踏襲してMr.B を Booby と引伸して揶揄している。ブービー夫人がジヨウゼフを誘惑する仕方もB氏と規を一にするものがあり、そこにも諷刺の調子がうかがえる。フイールデイングのリチヤードソンに対する諷刺はパミラ、B氏に対して設定されたジヨウゼフ、ブービー夫人の登場によつて展開される。ジヨウゼフについては恋人フアニーの出現によつてパロデイから解放されるが、ブービー夫人の侍女スリツプスロツプはこれまたジヨウゼフに野心を持つておりブービー側に属する人物である。ブービー夫人、スリツプスロツプがジヨウゼフら一行のあとを追うようにして田舎の屋敷への旅に出るという構成にも、フイールデイングが『パミラ』諷刺の意図を忘れていないことがうかがえる。又第四巻のパミラ自身の登場まで彼らに対する言及がつづいており、それを少したどつてみよう。

ブービー夫人の家から追出されて田舎へ帰る途上ジヨウゼフは追剝に襲われて身ぐるみはがれるが、そこえ通りかかつた馬車に婦人がいるのをみて何か体を覆うものがなければそれに乗らないと言い張る。これに作者は「愛すべきパミラの汚れのない模範の影響」（ｉ．１２）だという説明を与える。その追剝からうけた傷が危険な状態にあるといわれてジヨウゼフが独り言に「あゝ、立派なパミラ！操正しい姉さん！あなたの模範があつたからこそ僕は富や美のあらゆる誘惑によく堪えて……操を純潔に保つことができたのです。どんな富や名誉や快楽が純潔を失つた償いになるでしようか。」（ｉ．１３）というところは貞淑をかざしながら富と地位の誘惑にまけたパミラへの諷刺である。ア

ダムズと落合つたジョウゼフは傷も回復し宿を立とうとすると、馬のえさ代を請求され払えなくて困つてしまう。この危機を救つてくれるのが外ならぬスリップスロップである（ⅱ．3）。『ジョウゼフ・アンドルーズ』のいわゆる道中記をなすこの部分が『パミラ』のパロデイとしてこの小説を書き始めたことを全然忘れて書かれたとするならば、ここで必すしもスリップスロップを登場させる必要はなかつたであろう。パロデイの部分と道中記とは、プロットの点からみれば、明らかに木に竹をついだ様な形になつてこの小説の難点となつているが、諷刺の面を指摘する場合相変らずリチヤードソンへの意識がつづいていると考えられる。スリップスロップはアダムズらに馬車を提供し旅をつづけることになつて物語を先に進めている。アダムズはトマス・ブービーは立派な人だつたが自分に会うひまがなかつたという。それには一つにその奥さんの罪もあるとし、「私の着物がお邸の食卓の紳士方にふさわしくないという意見だ」（ⅱ.8）といつてブービー夫人の虚栄心を諷刺している。又アダムズとフアニーが盗賊だとされて判事の前につき出された時に、一座の一人がブービー夫人を知つていないかと聞くことから無罪を保障されることになる（ⅱ．11）。　単にブービー夫人の名前への言及だけで物語が進展する。フアニーが好色な郷士のもとへ連行されるところでもブービー家の執事ピーター・パウンスが登場して危機を救つている（ⅲ．12）。やがて一行がブービー邸に近づきつつあるところで「これは気をつけなければならぬ名で、悪意ある人々がその邪な心のままにこの名を立派な田舎の地主方にあてはめるかも知れない」（ⅲ．2）とするあたりブービー一族に対する諷刺がみられるが、トマス・ブービーだけは例外で、先に指摘した様にアダムズがほめているし、ジョウゼフも「立派な紳士だつた」（ⅲ．5）という。これはフイールデイングの得意な対照（contrast）の効果（註7）で、B氏を女性にして仕立てられたブービー夫人の虚栄心の強い好色な性格を一層鮮かにするためであつたろう。

道中記における『パミラ』への諷刺はこのような断続的な言及によつて進め

られるが、第四巻第一章でブービー夫人が追いつき、又第四章で甥ブービー（『パミラ』のB氏）が妻のパミラと共に登場して再びリチヤードソンへの諷刺が大きく表面にうち出される。ブービーは結婚によつてパミラの地位を引上げたと同様、その弟も上流階級に引上げようと考え、ジョウゼフに身分のひくい　フアニーとの結婚をあきらめさせようとする。それにパミラが口添えるが、ジョウゼフにフアニーは少くとも姉さんの仲間ではないかと言われて、パミラは、

「あの人は以前には仲間でした。しかし私はもはやパミラ・アンドルーズではありません。私は今ではここにおられる紳士の奥様です。そこであの人より身分が上です。‥‥」（iv. 7）

と答える。ここで成り上り根性のパミラの思い上りが鋭く諷刺されている。これはフイールデイングが笑いの源泉とした気取り（affectation)の暴露である。パミラはジョウゼフとの結婚を考えるフアニーも叱りつける（iv.11）が、最後に彼女の素性が知らされ、フアニーが本当の妹だと分ると今度は非常に礼儀正しく応待している　（iv.16）。これも相手を身分で判断して、低いものを軽蔑し高いものに追従するパミラにあてた諷刺である。

このようにみてくるとフイールデイングは少くとも『ジョウゼフ・アンドルーズ』執筆中常に『パミラ』を意識してそれを諷刺することをめざしており、その点からこの小説の構想を考えていると思われるが、ジョウゼフに憤慨して叫ぶブービー夫人の、

「おまえの姉のために国中にいい恥さらしをした私の親戚の不品行をいいたてて私を侮辱するつもりかい。あの牝狐めが。私はジョン・ブービーの亡くなつた奥様が、あんな女を家においておかれたのが不思議でならない。‥‥‥」（i.8）

という言葉にみられるようなパミラを男心を知りつくしたしたたか者とする解釈は、この小説の他の部分には全くといつてよい程みられない。フイールデイ

ングは『シャミラ』においてとつた峻厳な諷刺の態度からぬけ出して、上にみたように広い視野に立つてパミラの思い上りやブービー夫人の虚栄心などをとりあげている。これらの点は『パミラ』をぬきにしても人間性一般への諷刺として十分存在理由をもつものと考えられる。小説の最後で、「ジョウゼフは両親にならつて隠とん生活を送り‥‥上流生活に立ち現れるようなことをしないと断言している」(Ⅳ・16)というところでも、上の階級へのし上ろうとするパミラ、ひいては作者リチャードソンの生活信条へのあてつけであると同時に、上流社会の空虚さを見とおした(註8) フィールディングの社会諷刺の一端がうかがわれる。そこで、この小説では単に『パミラ』諷刺に終始することなく新しいジャンルの開拓を意図して広く当時の社会を冷静に観察し、社会諷刺を大きく打出しているとみられる。

〔5〕

『ジョウゼフ・アンドルーズ』が『パミラ』に対する諷刺のみに終つていないことを指摘するには、『パミラ』諷刺が断続的な言及にとどまつた道中記の部分で最も活躍するアダムズという人物の創造に注意しなければならない。アダムズは善良で純真素朴な愛すべき人物で彼の登場する到る所に絶えず笑いをひきおこしている。フィールディングはアダムズを彼と交渉をもついろいろな人物との巧みな対置の上に問題を展開していつたと考えられる。このアダムズとの対置はいわゆる対照の効果によつて他を一層鮮かに浮び上らせることになる。

ジョウゼフの怪我を診察した外科医は彼が死人も同然だといい、更に自分の学殖のあるところをひれきする(Ⅰ.14)が、実際は医者の言うことがいいかげんで後にアダムズがいう通り「頭の傷は決して危険ではないが、あの医者は無学のくせに、おまえを治したと手柄らしく吹聴したいのだ」(Ⅰ.15)。これは明らかに当時の医者の無学に対する諷刺である。牧師バーナバスは俗物

であり、さきの外科医と共に泥棒を判事の前につき出すためありもしない法律の知識をひれきし互に論争する。これについてフィールディングは「判事や村人の前で自らの才能をみせたいというのが、作者のみるところでは、こうした熱意の唯一の動機であつた」(*ibid.*)と説明し、このあと「あゝ、虚栄よ！」で始まる擬古文調の一くさりがつづいて虚栄心が鋭く諷刺される。説教集の出版に大きな期待をかけてはるばるロンドンに出てきたアダムズは、牧師バーナバスに末世の現代で説教集を読むようなものはないと意気込みをくじかれる。彼らは宗教的意見が異り、ホワイトフィールドをめぐつて論争している。又アダムズは本屋に紹介されるがあつさり出版を拒否される。この本屋が説教集でも芝居でも一番売れるのが自分にとつて最上の本だが説教集は売れないからというと、アダムズは世俗的な芝居と比較されて憤慨しており(i.17)、実利的な出版屋が諷刺の対象となる。世俗的な牧師に対する諷刺はトラリバーの描写にみられる。この人物は牧師ではあるが、農夫の様な生活をし、けちん坊でアダムズが借金に行つたのを拒絶する(ii・14)。それにも拘らず彼は慈善家の評判をとり慈善についてよく心得ている。アダムズは慈善は実行の問題と考えており、知識としてのみ知つている牧師トラリバーと対置されている。更に金持のトラリバーが拒絶したものを貧しい行商人から与えられてアダムズは窮地を脱することになり(ii・15)、これによつても諷刺の効果が一層強められる。ブービー家の執事ピーター・パウンスは残忍なほどの貪欲をもつており、召使たちに給料日をすぎてから前貸しだといつて50パーセントもの利息を天引して渡したり、主人夫妻らに金を貸したりして金を貯めこんでいる(i.10)。彼は慈善を説くアダムズに向つて、慈善とは行為の問題でなくそれをしたいという気持の問題だといい、貧しい者の苦しみについて「どこの野原でもあんな立派なサラダの摘める国で、どうして飢を訴えることができるのか、....
寒いとか着物がないとかいうのは贅沢や習慣に導かれた悪なのだ」(iii.13)

という。これは貪欲で冷酷な執事の諷刺である。乱暴にもアダムズたちを調べもせずに監獄に送ろうとしたり、アダムズのもつているアエスキロスの写本を暗号だと思いこむ無学な治安判事も諷刺を免れない(Ⅲ.11)。又アダムズ一行を自宅に招待し彼を散々なぶりものにして楽しみ(Ⅲ.7)、更にフアニーの美しさに目をつけて取巻き連中に彼女をさらわせる郷士の低能さとそれにへつらう取巻き連中がそれぞれ諷刺の対象となつている。このように純朴で善良なアダムズを引き立て役として諷刺の効果を強めているが、そのアダムズ自身も弱点を暴露している。世事にうとく偽善者たちにだまされたり、邪悪な人物から翻弄されたりする。アダムズがジョウゼフにキリスト教徒たる者はどんな不幸にも満足してあきらめるべきだと説いているところへ、自分の末の子が川にはまつたという知らせをうけて狂気のように悲嘆し(Ⅳ.8)、その人間的な弱点をあらわしている。

いわゆる道中記の部分を中心として、この外種々の階層の人物を通して当時の社会のいろいろな側面が暴露され、その弱点が諷刺されている。ジョウゼフを襲つたような追剝の横行(Ⅰ.12)。傷ついたジョウゼフと馬車に同乗しないという上品ぶつた婦人や際どい冗談をとばす紳士と弁護士(*ibid*)。外套を貸そうとしない紳士や馬車屋連。しかしここで駆者がはおつていたたつた一枚の外套を脱いでくれる。フイールデイングはこの駆者について「後に雌鶏のねぐらを荒したために追放された若者である」という説明を加えて皮肉つている(*ibid*.)。タウワウズ夫人のように客の身なりによつて態度のかわる宿の内儀。ジョウゼフのような下僕と一緒に駅馬車に乗るのはいやだという勿体ぶつた婦人。この女の父親はもと駆者だつたという(Ⅱ.5)。フアニーを襲いながら逆にアダムズとフアニーを悪人にしてしまう悪賢い悪漢(Ⅱ.10)。犯人逮捕のほうびを誰が一番多くもらうか議論し乱闘する連中(Ⅱ.11)。いい加減な約束をしてはそれを守らない紳士(Ⅱ.16)。ウイルソンの話に出てくる社交界の伊達者どもの虚栄心(Ⅲ.3)。ブービー夫人の奸計に一役

買う法律の知識をもたない弁護士スカウト（ⅳ．3）や、でたらめな裁判をする治安判事フロリック（ⅳ．5）等々。

フイールデイングは当時の社会の鋭い観察から材料をえてその風俗を描き出しているが、特に治安判事としての彼の生活からも説明されるように、社会の裏面までも知り尽し又社会の弊害をみて、その改善・改革をめざしていたのは明らかである。そのために社会の真実を描きながらその歪みを示しそれに諷刺を加えるという方法をとつたとみられる。その手法はフイールデイング自身「私は人でなく風習を、個人でなく種属を描く」（ⅲ・1）とのべているところから判断されるように、彼の小説の中でいろいろな階層の人物を通して当時の人々の姿を描き出し、そこに一般的な人間性を求めようとする。こうした普遍的な人間像の描写をめざしている。この方法のうちに彼の描く人物は、個人的特徴と普遍的特性を兼ね備えてリアルに生々と描かれることになる。

更に注意すべきことはフイールデイングの現実把握の仕方で、彼は現実をじつと凝視するが、それからある程度距離をおいて広い立場から偏らない態度で現実の姿を追求し、その歪みとか悪を容赦なく暴露し矯正しようとする限りにおいて、それが諷刺という形をとるのは当然だと考えられる。フイールデイングの普遍的人間性の追求と関連しその諷刺は、

「個々の人物の大部分を描く場合に、我々は個人を鞭をうつつもりはなく、同類のすべてに鞭を加えたいと思うと同じく、概括的な記述においても、万人にあてはめるつもりはなく、多くの例外があることを理解されたい。」（ⅲ・1）

といつた性格をもち、又上でみた様に『シヤミラ』の厳格な諷刺・揶揄から一歩後退したフイールデイングは自分を厳しい誹謗家から区別して、

「……一人の憐むべき卑劣漢を、彼の小さなとるに足らない知人の仲間におばいてみせるためでなく、何千人という人に、彼らの私室において鏡をつきつけ、自らの欠陥をじつくり眺めてそれを減じるように努めさせ、かくしてひそかな屈辱を忍ぶことによつて公けの恥辱を免れるようにするためである。

これが諷刺家と誹謗家との間に境界線をひき、両者を区別するためにひそかに欠点を正してくれるのに対し、後者は死刑執行人のように、他人への見せしめとしてその人自身を公然と暴露してみせるのである。」(*ibid.*)

といい、自ら諷刺家をもつて任じ、『ジョウゼフ・アンドールズ』において目ざした諷刺の方法を明らかにしている。諷刺の対象としてあげられる牧師トラリバーにしろ、執事や弁護士にしろ、皆興味ぶかく描写されており、鋭い非難をあびせられているものはいない。フィールディングを誹謗家に陥らせなかつものは「人生は到るところに、正確な観察者には、滑稽なものを提供している」(Preface)と確信する彼の喜劇精神であり、彼によれば笑いの対象である気取り(虚栄と偽善から生じるという)が諷刺される限りにおいては痛烈な非難となることはない。

〔6〕

以上でみた様に、リチャードソンのモラルに反撥を感じたフィールディングは『パミラ』の諷刺という形をとつて『ジョウゼフ・アンドルーズ』を執筆するが、それにとどまらず、広く社会諷刺を展開している。彼の意図したものは当時の社会における歪みの矯正であつたろう。これが、人生をdetachmentをもつて偏らない角度から眺めようとするフィールディングをして、当時の風俗のリアルな姿を描き出し、その歪みを諷刺させることになつたと考えられる。この諷刺となつてあらわれた彼の小説執筆の態度が当時のいろいろな人間を通して普遍的な人間性をとらえ、十八世紀の社会の姿を生き生きと描き出すことになつたといえる。それ故に『ジョウゼフ・アンドルーズ』でとつた諷刺の方法は、フィールディングのおゝらかな人生観照の態度とつながるもので、『ジョウゼフ・アンドルーズ』に始まる彼の小説の性格を決定づける重大な要素となつていると思われる。

（註）

1. Aurelien Digeon, *The Novels of Fielding*, 1925, 130.
2. この著者がフィールディングであることについてはF.H.Duddenが詳細に論証している。*Henry Fielding; His Life, Works, and Times*, 1952, 319–23.
3. F.H.Dudden, *op.cit.*, 325.
4. *Ibid.*, 258–62.
5. 例えばF.H.Dudden, *op.cit.*, 337.
6. *English Satire*, 1958, 109.
7. *Cf. Tom Jones*, v, 1.
8. *Ibid.*, xiv, 1

Select Bibliography

Allen, Walter. *The English Novel; a Short Critical History*. London: Phoenix House Ltd., 1957.

Digeon, Aurelien. *The Novels of Fielding*. London: George Routledge & Sons, Ltd., 1925.

Dudden, F. Homes. *Henry Fielding: His Life, Works, and Times*. 2vols. Oxford: Clarendon Press, 1952.

Fieldjng, Henry. *An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews*. Edited by Sheridan W. Baker, Jr. Berkeley: Univ. of California Press, 1953.

———. *The Works of Henry Fielding*. Edited by George Saintsbury. 12vols. London: J.M.Dent &

Co.,1893.

Mckillop,Alan Dugald. *The Early Masters of English Fiction*. Lawrence:Univ.of Kansas Press,1956.

Richardson,Samuel.*Pamela*.2vols.Everyman ed. London:J.M.Dent & Sons.,1957.

Sutherland,James. *English Satire*. Cambridge University Press,1958.

Watt,Ian. *The Rise of the Novel:Studies in Defoe,Richardson and Fielding*.London: Chatto & Windus,1957.

朱牟田夏雄『フィールディング』東京：研究社，昭和３１年．